

## ニーチェ著『善悪の彼岸』

### 序

真理は女である

独断家の誤謬 ex. プラトン主義、キリスト教

⇨これに対する戦い—華麗な精神の緊張(ヨーロッパ人は緊急事態と感じているけれども)を創り出す

遥かな標的?をも射当てることができる

### 第九章 高貴とは何か

#### 二五七

「人間」を高める 「距たりの感じ」/貴族社会の仕事(265頁)

貴族階級=野蛮人階級

#### 二五八

貴族制のために不完全な人間、奴隷、道具にまで押し落とされ、引き下げられざるをえない無数の人間の

犠牲を良心の疚しさもなく甘受する

→社会は社会自らのために現存すべきではなく、むしろただ社会は選り抜きの種類の人間がその高次の

任務へ、そして一般に高次の存在へ高められうるための下部構造であり、足場であるべきだ

#### 二五九

良俗=社会の根本原理→生の否定への意思

生=力への意思/「搾取」は生あるものの本質、根本事実として認めるほどに正直であれ

#### 二六〇

主人道徳

「よい」と「わるい」との対立は「高貴な」と「軽蔑すべき」というほどの意味

高貴な種類の人間は、自分を価値の決定者として感じる/価値創造的

奴隷道徳

強力な者たちの徳に対して、そこで尊重されるすべての「よきもの」に対して敏感な不信をもつ

奴隷道徳は本質的に功利道徳 力と危険性が悪に属するもの

●奴隷道徳—「悪人」とは恐怖をかき立てるもの/善人とは危険でない人間

⇨主人道徳—恐怖をかき立て、またかき立てようとするものは「善人」/「わるい」人間は軽蔑すべきもの

→「善」と「悪」という有名な対立

自由への渴望、幸福に対する本能、および自由感情の敏感さは必然的に奴隷道徳と奴隷的徳性に属する

⇨畏敬への、献身への技能と熱中とは貴族的な考え方と評価の仕方に見られる

→情熱としての愛が端的に高貴な由来をもつものでなければならぬが理解される

#### 二六一

高貴な人間が理解困難—虚栄

通常の間人はまず自分についての世評を期待し、またやがてはそれに本能的に屈服する=「奴隷」

虚栄的な者は自分について耳にするあらゆる好評について喜ぶと同じく、あらゆる悪評に心を悩ませる

#### 二六二

一つの種族が発生し、一つの類型が固定し強くなるのは、本質的に同じ不利な諸条件との長い戦いのもと

においてである

→あらゆる貴族的道徳—容赦するところがない、容赦なさそのものを徳に数え入れる

#### 二六三

#### 二六四

或る人間がその両親と先祖の特性や偏愛を体内に宿していないということは全くありえない—人種の問題

最善の教育と教養の助けによって成し遂げうることは、ただこのような遺伝を誤魔化すことだけ

→「教育」と「教養」は本質的に誤魔化しの技術たらざるをえない

#### 二六五

利己主義は高貴な魂の本質に属する

「われわれがある」如き存在にとっては他の存在が本性上、臣従してその犠牲となるべきである」

→高貴な魂は自らの利己主義というこの事実を何の疑問を抱くこともなく・・・それが事物の根本法則のうち

に基礎をもつものであるかのように解する/「それは正義そのものである」

自分と同等なものとの交渉における繊細さと自己制限—利己主義に更に付け加わる一片

→高貴な魂は自分の根底に潜む情熱的で敏感な報復の本能から、自分の取るだけのものを他にも与える

二六六

二六七

自己矮小化—彼(或る古代のギリシア人)の「趣味に反する」

二六八

●究極において月並みな平俗な体験こそが、人間をこれまで左右して来たすべての威力のうちで最も力強

いものであったに違いない。選り抜きの人々、より洗練された人々、より稀有な人々、より理解しがたい人々

はともすれば孤立的であり、別々に存在しているから不慮の災厄に逢会し、繁殖することも滅多にない。こ

の自然的な、余りにも自然的な、《似たものへの前進》を、類似なもの、通常のもの、月並みのもの、畜群

的なものへの—卑俗なものへの！—人間の進展を遮るためには、巨怪な対抗力を喚び起こさなければなら

ない

二六九

より高い人間、異常な素質をもった魂が頹廢し、没落するということは通則だからである

⇨尊敬されるような「偉人」というのは、後から作り出されたけちな拙劣な虚構である

→彼らがまさに女から、あのように容易に無際限な献身的な同情のあの爆発を浴びせられるということは、

いとも理解し易いところ

二七〇

深い苦悩を味わった人間は—人間がどれほど深く苦悩しうるかということが殆どその人間の位階秩序を規

定する—誰も精神的な誇負と嘔吐感とをもっている

厚かましい同情的な手で触れられることから身を守り、またおよそ自分と苦悩を同じくしない者から身を護るためには、あらゆる形式の仮装を必要とする。この深い苦悩は高貴にする。それは引き離す。

→「仮面に対して」畏敬をもち、心理学や好奇心を誤って用いることのないようにするには、より洗練された

人間性が必要である

二七一

二人の人間を最も深く引き離すもの、それは純潔に対する感覚と程度の差異である。

純潔という最高の本能は、これに取り憑かれた者を一個の聖者として、最も奇異な、かつ最も危険な孤独

化のうちに置く

二七二

高貴であることの徴。—われわれの義務を万人にとっての義務にまで引き下げようなどとは決して考えな

いこと。自己の責任を譲り渡そうと欲せず、わかち合おうと欲しないこと。自己の特権とその行使を自己の

義務のうちに数えること。

二七三

偉大なものに向かって努力する人間は、自分の進路で遭遇する者を誰でも手段と見なすか、または遅滞

させ妨害するものと見なすか、—或いは一時的な休息用のベッドと見なす

この種の人間は孤独ということを知っており、また孤独がどんなに甚だしい毒を含んでいるかを知っている

#### 二七四

持つ者の問題。

一つの問題の解決が内に眠っているようなより高い人間

天才は恐らく決してそう稀有なものではない。しかし稀有なのは、《カイロス》、すなわち「適切な時」を自

由にするために、偶然の額髪を捉えるために、必要とされる五百の手だ

#### 二七五

#### 二七六

いかなる種類の損傷や損失にあっても、下劣で粗悪な魂の方が高貴な魂よりも好都合である

#### 二七七～二八一

#### 二八二

われわれのうちの[選り好みをする]最も精神的な者たちは、食べさせることが最も困難であって、われわれ

の食事や食卓仲間について突然それを見抜いて幻滅を感じる時に起こるあの危険な《消化不良》を、

あの食後の嘔吐を知っているのだ

#### 二八三

およそ賞賛しようとして、自分と一致しない場合にだけ常に賞賛するとすれば、それは一つの洗練されてい

ると同時に高貴な自己抑制である。—その他の場合には、実は自分自らを賞賛しているにすぎないという

べきであって、これは良き趣味に反するものである

#### 二八四

●巨大な誇らかな放念を持って生きること、常に超然としていること。…。また慇懃というあの狡猾で陽気

な悪徳を仲間を選ぶこと。また勇氣・洞察・共感・孤独という自己の四つの徳の主人であること。孤独はわ

れわれにあっては、純潔への崇高な傾向および衝迫として一つの徳であるからだ。この衝迫は、人間と人

間との接触に際して—「社交において」—いかに避けがたく不純にならざるをえないかを察知する。あらゆる共同は、何らかの仕方で、どこかで、いつかは—「卑俗」にする

#### 二八五

最も偉大な出来事と思想—最も偉大な思想は最も偉大な出来事である—が理解されるのは最も遅い

#### 二八六

「ここでは展望は開け、精神は高まる。」しかし、高所に立ち、展望も開けてさえ—下を見下ろすような逆の

種類の人間がある

#### 二八七

●ここで決定的であり、ここで位階秩序を確定するものは…信仰である。すなわち、高貴な魂が自己自ら

についてもつ何らかの根本確信である。求められもせず、見出されもせず、恐らくはまた失われもしない或

るものである。—高貴な魂は自己に対して畏敬を持つのだ。—

#### 二八八

#### 二八九

あらゆる哲学は更に一つの哲学を隠している。あらゆる意見もまた一つの隠れ場であり、あらゆる言葉もま

た一つの仮面である。

#### 二九〇

すべての深い思想家は、誤解されることよりも理解されることを恐れる。

→「ああ、何故に君たちも私と同じようにあれほど重苦しい思いをしたがるのか」

## 二九一

およそ道徳は、総じて魂を眺める楽しみが可能となるための大胆な長い間の欺瞞なのである

## 二九二

哲学者とは、ああ、しばしば自己から遁走し、しばしば自己に恐怖を抱く存在である—が、しかし余りにも

好奇心が強いので、常に繰り返し「自己へ帰る。」

## 二九三

## 二九四

私は敢えて、その笑いの順位に応じて哲学者の位階秩序さえも決定せられる、と言いたい。—その最上

位に立つのは、黄金の哄笑を能くしうる人々だ。そして、神々もまた哲学する—私は多くの推論からすで

にそう断ぜざるをえない—とすれば、神々もまたそこで超人間的な新しい仕方であらうことを知っている、と

いうことを私は疑わない

## 二九五

ディオニューソスが哲学者であり、従って神々もまた哲学をするということ、これがすでに私には新奇なこ

とに思われ、油断のならぬことであり、恐らくほかならぬ哲学者たちの間に不信を喚び起こすことになるか

もしれない

若干の点においては神々も総じてわれわれ人間のもとで修行することができるのだらうと推測すべき十

分の理由がある

## 二九六

ああ、お前たちはそもそも何であるか、私が書き記し描いて来た思想どもよ！少し前までは、お前たちは

私を噓させ笑わせるほどになお多彩で、若く、また意地悪く、棘と秘やかな薬味に満ちていた。—そして

いまはどうか。すでにお前たちはその新味を失い、しかもお前たちの幾つかは—私を恐れるのだが—早く

も真理になろうとしている。それらはすでに何と不滅に、何と悲痛なほど正直に、何と退屈に見えることか！

## ニーチェ著『道徳の系譜』

### 第一論文「善と悪」「よいとわるい」

○魂の探求家たちや顕微鏡使いたちが、本当は勇敢な、俠気な、気位の高い動物であって、彼らの心情

と彼らの心痛とを抑えることを知っており、また真理のために、あらゆる真理のために、従って露骨な、不

快な、醜悪な、不都合な、非キリスト教的な、不道徳な真理のためにさえも、一切の望ましいものを犠牲

にするような驍を受けていてくれるように、と(21頁)

イギリスの心理学者:「もともと非利己的な行為は、それを示され、従ってそれによって利益を受けた人々

の側から賞賛され、『よい』と呼ばれた。後にはこの起源が忘れられ、そして非利己

的な行為は、ただ習慣的に常に『よい』として賞賛されたというだけの理由で、

実際  
また『よい』と感ぜられるようになった—あたかもその行為がそれ自体として『よい』も

のでもあるかの如くに」(22頁)

○「よい」という判断は「よいこと」を示される人々の側から生じるのではない/「よい」のは「よい人間」

自身

→高貴な人々、強力な人々、高位の人々、高邁な人々が、自分たち自身および自分たちの行為を「よい」

と感じ、つまり第一級のものと決めて、これをすべての低級なもの、卑賤なもの、卑俗なもの、賤民的なもの

ものに対置した。⇒「よい」と「わるい」との対立の起源(23頁)

「よい」という言葉は、「非利己的な」行為と初めから必然に結びついているわけでは断じてない

○スペンサーの説に従えば、「よい」とは以前にその功利性が証明されたものである

この功利は、いつも変わらぬ日常の経験であり、従って不断に新しく強調されてきている

○僧職者の手にかかる、全く一切がより危険なものになり、療薬や療法になるばかりでなく、更に慢心に

、復讐に、狡知に、放縦に、愛欲に、野心に、徳行に、病気になる。—いくら公平に見てそれに付け加え

るならば、人間の、僧職的人間のこの本質的に危険な生存形式を地盤として、初めて人間一般は一個の興

味ある動物となり、ここで初めて人間の魂はより高い意味において深くなり、かつ悪くなった。—そしてこれ

こそ実に、人間がこれまで他の畜類に対して保ってきた優位性の二つの根本形式なのだ！(31頁)

●騎士的・貴族的な価値判断の前提 戦争・冒険・狩猟・舞踏・闘技、そのほか一般に強い自由な活発な

行動を含むすべてのものである

⇒僧職的評価形式は別な前提 ユダヤ人的価値転倒の遺産(33頁)

→少なくとも確実なことは、《この標のもとに》イスラエルがその復讐とあらゆる価値の転倒とによって、こ

れまで幾たびとなくあらゆる他の理想に対して、あらゆる貴族的理想に対して凱歌を奏してきたという事実

○すべての貴族道徳は勝ち誇った自己肯定から生ずる(37頁)

⇒奴隷道徳は「外のもの」、「他のもの」、「自己でないもの」を頭から否定する

→この否定こそが奴隷道徳の創造的行為、《反感(ルサンチマン)》の本性

・奴隷道徳の行動は根本的に反動⇒貴族的評価様式は自発的に行動し、成長する

・貴族的人間は自分自身に対する信頼と公明をもって生きる/能動的(39頁)

⇒《反感》をもった人間は、正直でもなければ無邪気でもなく、また自分自身に対する誠実さも率直さも

もたない/受動的

・貴族的人間、真の「敵に対する愛」をもつ⇒《反感》をもった人間、「敵」=「悪人」⇒「善人」自分自身

●「よい」→「わるい」、貴族が自発的に創る

→「悪い」、不満な憎悪の醸造釜から出た

・貴族的種族とは、通ってきたすべての足跡に「蛮人」の概念を遺した者たちのこと(42頁)

・「人間」という猛獣を飼い馴らして温順な開花した動物=家畜にすることこそあらゆる文化の意義

→反動と《反感》の本能は、真の文化の道具と見なされなくてはならない(44頁)

この「文化の道具」は人間の恥辱であり、むしろ「文化」一般に対する懐

疑

●われわれは今日、一つとして増大を欲するものを見ない。われわれは、すべてが次第に下へ下へと向

かって行き、より稀薄なもの、より善良なもの、より怜悯なもの、より気楽なもの、より凡庸なもの、より冷

淡なもの、よりシナの的なもの、よりキリスト教的なものへ下って行くのを予感する—疑いもなく、人間は次

第に「より善く」なっていくのだ—(46頁)

「われわれ弱者は何といっても弱いのだ。われわれはわれわれの力に余ることは何一つしないから善人

なのだ」というより以上の意味はもっていない(48頁)

○理想の創造(49頁)

『われわれ善き者—そのわれわれこそは正しき者だ』→『神の国』の到来(52頁)

○「よいとわるい」、「善と悪」という二対の対立した価値は、幾千年の長きにわたる恐るべき戦いを地上に

おいて戦ってきた。…そして今日では、「より高い存在」、より精神的な存在の標徴としては、この意味に

おいて不和であること、そして現になおこの対立のための戦場であることより以上に決定的なものは、恐ら

く何一つない

この戦いの象徴は「ローマ対ユダヤ」、「ユダヤ対ローマ」と呼ばれている。

勝利はユダヤ、キリスト教→宗教改革、フランス革命

○「善悪の彼岸」というあの危険な合言葉でもって言わんとするところ…少なくとも「よい・わるいの彼岸」

ということではない(59頁)

### 第三論文 禁欲主義的理想は何を意味するか

○禁欲主義的理想—《空虚の恐れ》が示されている←人間意思は一つの目標を必要とする(118頁)

○ある芸術家をその作品から切り離し、芸術家自身をその作品と同程度の真面目さをもって扱わないと

いうことは、確かに最もよい態度である。(123頁) ヴァーグナー

・完全無欠な芸術家などといったものは、「实在」や現実とは永遠に別個の存在である。

・その一面また、誰にもわかるように、彼が自分の最も内的な生存のこの永遠の「非實在性」と虚偽性

に時には耐まらない倦きることもありうる→現実的なものへ手を伸ばし、現実的であろうと試みる=芸術

家の典型的な出来心

●芸術家—皆無(様々)←自立がない

ショーペンハウアーによれば、音楽は爾余一切の芸術とは区別さるべきものであって、それ自体において

独立的な芸術であり、諸他の芸術のように現象界の模写を提供するものでなく、むしろ意志そのものの言

葉を、しかも「深淵」から直接に、その最も独自の、最も根源的な、最も原始的な啓示として語るもので

ある

ショーペンハウアーはカントの美学上の問題に対する見方を利用した

⇨君は美に関するカントの定義(「美とは関心なしに心に適うものである」)を全然カント的に理解してなか

った、君もまた一つの「関心」から美を楽しむのだ(130頁)

○地上に哲学者が存在するかぎり、また哲学者が存在した所にはどこにも、官能に対する哲学者特有の

怒気と怨恨とが見られるということは争いがたい事実である…また同様に、そこには禁欲主義的理想に

関する哲学者特有の偏頗と愛着とが見られるということも争いがたい事実である(132頁)

●哲学者—彼の生存のみ

彼らが考えている禁欲主義的理想とは、神化され翼を与えられて、生の上に憩うよりはむしろその上を飛

び廻る動物のもつ朗らかな禁欲主義である—それは彼らの最善の生存、彼らの最美の結実の最も固有な、そして最も自然な諸条件として(135頁)

哲学者がもし自己を意識するようになったとしたら、彼は自らを《われらは禁ぜられたるものを追及す》の

化身として感ぜざるをえなかったであろうということ

→自らを意識しないように警戒した、すべての善きものについても事情は同じ(141頁)

●すべての善きものは、かつては悪しきものであった(142頁)

○法に対する服従、「法」は長らく「禁ぜられたるもの」であり、一つの無法であり、一つの改革であった

○禁欲主義的理想は長い間哲学者のために出現の形式として、生存の前提として役立ってきた(145頁)

→禁欲主義的僧職者は最近に至るまで厭わしい陰気くさい青虫の姿をとっており、哲学はそうした姿に

おいてのみ生存を許されはいまわっていたのだ

●禁欲主義的僧職者は、あの理想のうちに彼の信仰を見出すばかりでなく、彼の意志、彼の力、彼の利

害をも見出すのだ。彼の生存への権利はあの理想と存亡を共にする。(146頁)

→禁欲生活は一つの自己矛盾だからである。すなわち、ここには一つの比類なき「反感」が支配してい

る。生のある部分にではなく、むしろ生そのものの上に、生の最も深く、最も強く、最も基礎的な諸条件の

上に君臨しようとする一つの飽くことなき本能と権力意志の「反感」が支配している。ここには力の源泉

を塞ぐために力を使用しようとする一つの試みがなされている。(148頁)

⇒全く何らの方向をももたない眼を、漠然と見ることをして初めて本当に何かを見ることたらしめる能動的な解釈的な機能が禁圧され欠如しているような眼を考えることが要求されている(150頁)

○禁欲主義的理想は頽廃しつつある生の防衛本能と救治本能から発生する一手段であり、生を維持する

ための一つの策略である(152頁)

○人間の大きな危険は病人である。悪人でもなく、「猛獣」でもない。初めから不運なもの、虐げられている

者、打ち挫かれている者—彼ら最も弱き者どもこそは、最もしばしば人間の足下に坑を掘って生活を覆えし、生に対する、人間に対する、われわれ自身に対するわれわれの信頼に最も危険な害毒と疑惑とを注ぎ込むのである。

→何らかの形で優越を示そうとする病人どもの意志、健康者に対する暴虐への間道を求める奴らの本能、

—ほかならぬ最弱者どものこの権力意志がどこに見出されないというのか！(156頁)

○病人が健康者を病気にすることのないように予防する—これこそ実に地上における最上の観点でなければならぬ→距離の感じ(158頁)

○禁欲主義的僧職者の試みは、病人をある程度まで無害なものにすること、癒しがたい者どもを自滅させること、比較的軽症の患者を峻烈に自己自身に向かわせ、彼らの「反感」に逆説的方向をとらせること(163頁)

→苦しみ軽減、あらゆる種類の「慰藉」—これこそは彼の天才そのものにほかならぬ ex.キリスト教

○罪のない手段

①生活感情一般を最低点まで引き下げることによって試みられる

無憂、それは彼ら(苦しんでいる者など)から積極的なものそのものとして感じられなければならない(170

頁)

②機械的活動とそれに属するもの—絶対的な規則正しさ、几帳面な没我的服従、千篇一律の生活様式、

時間の節用、「非人格性」への、自己忘却への、「自己無視」への

の

一種の許可、否、むしろ訓練

→群居のあるところ、その群居を欲したものは弱さの本能であり、それに組織を与えたものは僧職者の狡知である(173頁)

○「罪のある」手段(174頁)

③感情の放蕩

→「余りに善良」(177頁)

禁欲主義的理想を感情の放蕩のために役立たせる(178頁)

・負い目の感情を利用

・人間は何らかの仕方、少なくとも心理的には・・・理由も目的もわからずに、自己自身によって苦しめられている。→彼は理由を求め、病人が「罪人」にされた、人々は苦痛に渴した。(181頁)

○「より善くする」とは「飼いなす」とか、「弱くする」とか・・・いうほどの意味(182頁)

禁欲主義的理想は、諸君の十分に察知しているが如く、いかなる場合にも、またいかなる場所においても

決してよき趣味の学校ではなかった(186頁)

⇒節度の欠如、節度に対する反感、それはそれ自身《これに超ゆるものなし》である

○禁欲主義的理想は一つの意志を表現し、一つの目標(一般的なもの)をもっている。(187頁)

cf.「科学」は禁欲主義的理想の反対物ではなく、その最も新しいかつ最も高貴な形式そのもの(189頁)

cf.理想主義者—禁欲主義を強いるもの、すなわち真理へのあの無条件的な意志は、禁欲主義そのものに

対する信仰である(193頁)

→「前提なき」科学といったようなものは決して存在しない。・・・一つの哲学、一つの「信仰」が存在するの

は、常に科学に対して一つの方向、一つの意味、一つの限界、一つの方法、一つの存在権を賦与するた

めでなければならない

●哲学者にはすべて、真理そのものへの意志がどういう意味でまず一つの弁明を必要とするかについての意識が欠けている。・・・禁欲主義的理想がこれまであらゆる哲学の支配者となっていたからだ。

⇒禁欲主義的理想の神に対する信仰が否定せられるその瞬間から、新しい問題もまた存在する。

真理の

価値に関する問題がそれだ。・・・真理の価値は試みに一たびは問題とされるべきである、と。(195頁)

○科学と禁欲主義的理想は真理に対する同じ過重視の上に立っている

→人間の品位に対する信仰、人間が存在の序列において占める独自のかけがえのない地位に対する信

仰は失われてしまった(198頁)

○こうした[理想の]生産過剰に対しては明らかに一つの新しい貿易の可能性が開かれている。小さな理

想偶像とそれに附随した「理想主義者たち」でもって、明らかに一つの新しい「商売」が始められるべきだ

(203頁)

○今日、精神が几帳面に、強力に、正直に、誤魔化しをやらずに働いている他のあらゆる場所では、精神

は今や総じて理想というものをもっていない、真理への意志だけを例外として。

最も峻厳に、最も精神的に方式化されたあの理想そのもの(205頁)

→真理への意志への自覚によって、今後道徳は没落する。

●禁欲主義的理想の意義—意志そのものが救われた 一つの意志であるということに変わりはないのだ!

論点

・人間の「静」状態における墮落を指摘し、「静」から「動」への転換をはかったといえるのではないか。それ

が真理への意志そのものの尊重につながるし、「神は死んだ」というセンセーショナルな言葉も、この文脈

から理解されるべきなのかと思う。